

### 3 検査科

[人事など]

2014年度は高橋加奈子を新入職員として迎え、品川部長・加野臨床検査専任部長・出張玲子病理担当部長のもと、常勤臨床検査技師18名、臨時職員臨床検査技師5名、委託職員2名（受付・洗浄）で業務を行いました。

菊池眸の病休・産休に加え、臨時職員の相次ぐ退職に厳しい状況となりましたが、新たな臨時職員を迎えることができ、業務に支障をきたす事態には至りませんでした。

検査に関する専門的情報やトピックスなどを発信して、院内各部署とのコミュニケーションを図ることを目的に、ミニコミ紙“Labo mail 寸暇旬報”の発行を2014年1月から開始し、本年度は5回発行しました。3月からは、パニック値として報告した個々の事例を検査部門システム内に記録し、検査管理医が確認するシステムを開始しました。今後データを蓄積しパニック値に関する検討に役立てたいと思っています。院内検査項目の追加や院内検査機器管理など、検査科に対する期待や要望が多く寄せられています。マンパワー不足ではありますが、今後も少しでもご期待に沿えるように、検査科全体で取り組んでいきます。

	2012年度	2013年度	2014年度
検査総件数	1,390,098	1,385,446	1,408,097
外来総件数	1,024,197	1,055,786	1,088,011
入院総件数	365,901	329,660	320,086
外来/総件数比率	0.74	0.74	0.77

	2012年度	2013年度	2014年度
外注件数	31,171	34,309	31,262
外注金額	39,687,859	40,876,517	45,876,349

[採血室]

外来患者数増加に比例して、採血患者数も増加しました。2月の移転までは仮設運営で、待合スペースが狭いなどの問題を抱えながらも、できるだけ待ち時間を減らすために、8時からの採血業務に検査科全員体制で業務に当たりました。本稼動後は採血台の増設や中待合運用により、待ち時間を短縮する事ができました。

採血室採血者数	2012年度	2013年度	2014年度
合計	51,280	57,009	59,238
日平均	210.2	234.1	231.125

[検体検査]

4月よりZTT・TTT、12月よりプロカルシトニン半定量、1月より高感度トロポニンIの夜間休日も含む院内検査を開始しました。また10月よりBNPも夜間・休日対応を可能

としました。

5月に免疫測定装置 Architect-i1000を導入し、障害時におけるバックアップ体制の強化を行い、腫瘍マーカー・甲状腺ホルモン等の免疫学検査においても、機器障害による結果報告の遅延が解消されました。

検査総件数は若干減少しましたが、1 オーダあたりの件数の減少によるもので、経営的には良好な方向に向かっていると思います。臨時職員に頼らざるを得ない状況で、特に尿沈渣・血液像・骨髄像など直接技師の能力が反映される項目で、知識・技術・能力向上が課題です。

検体検査部門	2012年度	2013年度	2014年度
一般検査	67,953	69,210	69,569
血液学的検査	131,165	136,864	139,830
生化学・免疫学的検査	1,098,072	1,146,322	1,124,590
輸血検査	7,201	8,155	7,970
検体合計	1,304,391	1,360,551	1,341,959

#### [生理検査]

2014年11月から数回にわたる小規模な移転を繰り返し、落ち着かない半年間でしたが、年度末に最終移転を行い、待望の生理検査受付が稼動しました。プライバシーの確保のため、全ての検査室が個室化され、落ち着いた検査環境が整い、患者様からも好評です。

検査件数の増加傾向は変わらず、前年度を上回る件数となりました。マンパワーに余裕のない中、超音波検査を中心に、臨床からの要望の多い至急検査への対応にも努力しました。検査レベルの向上が課題です。

生理検査部門	2012年度	2013年度	2014年度
循環器機能検査	13,433	14,730	14,875
脳・神経機能検査	287	232	260
呼吸機能検査	2,710	3,227	2,966
前庭・聴力機能検査	1,870	1,513	1,998
超音波検査	8,693	9,793	10,708
生理機能その他	182	191	495
生理合計	27,175	29,686	31,324

#### [細菌検査]

一般細菌検査は前年度比106%、抗酸菌検査は112%と業務量は増加しました。

ICT活動にも力を入れ、4月にクロストリジウム ディフィシルが産生する毒素（CDトキシン）陽性の患者が数名発生した事例においては、院内感染の可能性を考え、感染対策室とコンタクトを取りつつ川崎病院検査科・健康安全研究所の協力のもと、詳細な検査を行いました。また週ごとに薬剤耐性菌データ（アンチバイオグラム）を集計し、感染対策

に貢献しました。

学会活動では、菊池、関根が各種学会で発表を行いました。

細菌検査部門	2012年度	2013年度	2014年度
一般細菌検査	16,193	16,707	17,762
抗酸菌検査	6,513	6,233	6,970
微生物その他	87	122	135
細菌合計	22,793	23,062	24,867

#### [病理検査]

2013年12月に病理医 出張玲子先生着任、2014年度は病理医2名体制で病理診断管理加算Ⅱを取得しました。坂元 亨宇先生（慶應義塾大学医学部病理学教授）が4月より週1回で来院され、肝胆膵病変の緻密な病態解析が可能となりました。

市川将技師が細胞検査士の資格を取得し、念願であった細胞検査士2名体制が確立し、今後の細胞診業務のさらなる充実が期待されます。

検査件数は、組織診107%増、細胞診112%増で、特に免疫染色は167%増と大きな増加となりました。診断精度の向上と共に今後も一層の増加が予想されます。

解剖件数は一昨年度より8件減の10件にとどまりました。再編整備2期工事が完了し、新棟に霊安室が配置され、また解剖室にはバイオハザード対応解剖台、ストレッチャー収納式遺体冷蔵庫が設置され病理解剖業務体制が完備しましたので、今後の解剖件数増を期待します。

病理検査部門	2012年度	2013年度	2014年度
細胞診検査	3,991	4,373	4,713
病理組織検査	2,967	3,268	3,649
迅速凍結組織検査	81	104	120
電子顕微鏡検査	17	18	10
病理解剖	13	12	8
免疫組織 その他		868	1,447
総件数	7,069	8,643	9,947

#### [輸血製剤管理]

各科診療体制の充実と共に、使用血液製剤の総件数が増加しています。また在庫管理を適正に行い、廃棄率が2013年度の3.12%から2.13%と低下しました。

血液製剤使用単位数	2012年度	2013年度	2014年度
赤血球製剤	2,170	2,654	2,218
新鮮凍結血漿	791	304	639
濃厚血小板	1,405	2,535	2,895
自己血 CPD	283	281	294
輸血合計	4,649	5,774	6,046

#### [夜間・休日検査]

救急受け入れ患者数に比例して、2013年度に比べ、件数はやや減少しました。年末年始はインフルエンザ感染のピークと重なり、12月29日から1月3日の間に180件（前年54件）があり、多忙を極めました。一部増員して細菌検査も含めて迅速な報告に努めました。検体検査・心電図・輸血製剤管理・結核菌検査など多岐にわたる業務を1名の技師で対応しています。一度に色々な検査オーダーが出た場合や大量出血への輸血対応・分析器故障が発生した場合など、1名のみでの対応では非常に厳しい状況に陥る場面が多くなってきました。

夜間休日検査	2012年度	2013年度	2014年度
総件数	6,600	9,687	8,893

#### [チーム医療への参加]

ICT・NST・CKD・糖尿病教育などに積極的に参加しました。院内全ての心電計・血液ガス装置の保守管理も行いました。

救急センター開設に伴い、更新された血液ガス検査装置と心電計のオンラインにより、電子カルテで参照可能になるよう、検査科主体で機種選定やシステム構築を行いました。

#### [教育・研修]

各専門分野でレベルアップのために、科内研修会を27回開催しました。また各技師が積極的に学会活動や研修会に参加しました。市川将が念願の細胞検査士に、溝渕有美が2級臨床検査士（循環生理部門）に、関根由貴が2級臨床検査士（微生物部門）に合格しました。

臨床検査技師実習生4名の現地実習を約4ヶ月受け入れました。

初期研修医クルズスは、“検査全般”、“輸血検査”、“細菌検査”について行いました。

薬剤科実習生、近隣中学・高校生見学を受け入れました。

（文責 検査科担当課長 伊藤 万里子）